第１回天理市総合教育会議　議事録

開催日時	平成 29 年８月７日（月）　　９時 30 分～11 時 30 分
開催場所	天理市役所地下　31 会議室
出 席 者	並河市長、森継教育長、名倉教育委員会委員、前川同委員、 田中同委員、西畑同委員
欠 席 者	なし
事 務 局	藤田副市長、藤本理事、山中公室長、加藤総合政策課長、 三喜田同課係長、桑原同課主査、巽同課主査
事務局側	仲谷教育委員会事務局長、岡本同局次長、吉岡同局次長 綿谷学校教育課指導主事、笹尾同課指導主事 西岡教育総務課長、土田同課係長 嶋﨑生涯学習課長、天羽同課参与 榊児童福祉課長補佐

◇会議次第

〇開会

〇市長挨拶

〇案件

１．教育大綱「重点テーマ」の進捗状況について

２．奈良県学習状況調査の結果報告及び検証について

◇資料

〇次第

〇席次表（Ｐ１）

〇教育大綱重点テーマに関する報告書（Ｐ３～12）

＜事務局　三喜田＞

本日は、お忙しい中、お集まりいただきまして、誠にありがとうございます。予定時刻がまいりましたので、今年度第１回天理市総合教育会議を開催させていただきます。

まず、市長よりご挨拶をいただきます。

＜並河市長＞

みなさんおはようございます。大変お忙しい中、平成 29 年度の第１回目天理市総合教育

会議にご参集いただきまして、誠にありがとうございます。西畑委員様に関しては今回初めてご参加いただけるということで、ありがとうございます。また、台風５号がきておりますので、今回はコンパクトに要点を絞ってお話合いができればいいかと思っております。教育大綱に掲げました重点テーマそれぞれ進捗している部分がございますので、しっかりどういった形で動いているのかというのを共有したうえで、今年度の下半期に向けてどのような動きをしていくのかということが確認できたらと思っておりますし、成果が出ている部分もあれば、なかなか進まない部分というのもございます。どういった点が問題になっているのかを掘り下げて議論させていただければと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

＜事務局　三喜田＞

案件に入ります前に、資料の差替えと追加資料についてご説明させていただきます。委員のみなさまに事前に資料を送付させていただいた、本日の次第と席次表に差替えがございます。また、本日の追加資料として、県の学力調査の評価項目である「さまざまな力質問内容」を配布させていただいております。

したがいまして、本日の資料は、

○　次第

○　席次表

○　平成 29 年度第１回総合教育会議
　教育大綱重点テーマに関する報告書（Ｐ３～１２）

○　追加資料の「さまざまな力　質問内容」

というところでございます。

以上、資料に過不足等ございますでしょうか。

それでは、案件に入っていきたいと思います。

案件の議事進行につきましては、並河市長にお願いしたいと存じます。本会議の終了は１１時３０分を予定しております。よろしくお願いします。

１．教育大綱「重点テーマ」の進捗状況について

＜並河市長＞

では案件に入りますが、まず第１部といたしまして、教育大綱の重点テーマの進捗状況ということで、担当の方から説明させていただきます。

＜事務局　三喜田＞

資料３ページから１２ページまでの重点テーマに関する報告書に沿ってご説明させていただきます。

事務局の方からは項目１～８までを全てご説明させていただいた上で、各委員様に疑問

に感じられた点等ご質問いただくとともに、各取組についてご議論賜りたいと考えておりますので、よろしくお願いします。

（１）小１プロブレムの解消

＜事務局　三喜田＞

資料の３ページ、小１プロブレムの解消について説明させていただきたいと思います。

「小１プロブレムの解消」につきましては、教育大綱において「幼・保・小の連携を強化し、出前授業・出前保育や園児の学校訪問・給食試食会など、小１プロブレム解消のための取組を実施」することとされており、今年度においては、保育所・幼稚園・小学校の交流を計画的に行うべく年間の交流計画を作成して、これに基づいて校園所の交流を実施していきます。

また、昨年度より文部科学省の幼小接続事業を実施している丹波市幼稚園と丹波市小学校におきまして、緩やかな接続ということで「アプローチプログラム」及び「スタートカリキュラム」をそれぞれ作成するとともに、その効果的な活用方法等について市内の幼稚園・小学校に広めていきたいと考えております。

これまでの進捗状況については、報告書に記載のとおりですので、ご確認ください。

（２）中１ギャップの解消

次に、資料６ページ、項目２「中１ギャップの解消」に移ります。

「中１ギャップの解消」について、教育大綱では「小・中の連携を強化し、出前授業やオープンスクールなど、中１ギャップを生まないための取組を実施」することとされております。

今年度も、昨年と同様に、中学校の先生方による出前授業や学校説明会、中学校でのオープンスクールやクラブ体験等を実施します。

また、授業交流や小中合同研修を行って職員間の相互理解・相互連携を図ります。

そして、中学校への緩やかな接続を図るために、小中のみならず、同じ中学校区内の小学校同士の連携を推進していきたいと考えています。

＜並河市長＞

連携ものなので、いったんここで切ります。

まず小１と中１を迎えるにあたって、どれだけスムーズにいけるかというようなことでございますが、アプローチプログラムとスタートカリキュラムの作成について、もう少し具体的に説明してもらっていいですか。

＜吉岡次長＞

幼稚園の子どもが小学校に進むときに大きなハードルというのがありますので、よりスムーズに小学校に継続できるようにということで、アプローチプログラムというものを設定しております。丹波市小学校・幼稚園の場合は言語活動を中心に進めており、幼稚園の

子ども達が日々活動したことについて、自分の言葉でお友達に伝えていく、また、お友達が言っていることをしっかりと聞いて、それに対して問い返しをしていく、そういったことを日々の幼稚園の学習の中に位置づけてくれております。それを受けて、小学校の方でもかねてから言語活動を中心に道徳やその他の時間で自分の意見をしっかり伝える、そして友達の意見をしっかり聞くというところが共通点としてあるので、それを一つの連携ポイントとしてつないでいくということを今進めているところです。

＜並河市長＞
　どうですか。

＜吉岡次長＞
　今幼稚園の子ども達は活発に意見を言えるようになったと聞いておりますし、表情が明るくなって、伝えたい、話したいというようなところを日々の活動の中で言ってくれているようです。人前で話すことに対する抵抗感が少なくなっているようです。

＜並河市長＞
　去年始めたということは、もう去年の年長さんは小学生になったということで、実際溶け込むにあたってどうでしょう。

＜吉岡次長＞
　それに関わって小学校の先生が幼稚園に頻繁にやって来てくれていますので、幼稚園の子どもにとったら顔見知りの先生がいるとか、知っている先生がいるといったことで、幼稚園の子ども達にとっては、知っている先生がたくさんいるだけでも心強いのかと思います。

＜並河市長＞
　先生間が行き来するというところだと、２番目の中１ギャップのところも一緒かと思うのですが、もし委員の皆様方からご質問やご意見等ございましたらぜひお伺いしたいなと思います。

＜田中委員＞
　小１プロブレム、中１ギャップ含め、とりわけ今取り組まれていることについては、保育所も入って相対的にされているのならば、期待をしたいと思います。とりわけ言語活動ということは、今文科省が言っていると思うが、コミュニケーション能力も含めて、大変大事な視点だと思うので、今後とも十分練っていただくのを期待していきたいと思っておりますので、頑張っていただけたらと思います。
　それから特に小１プロブレムについては、小学校からのアプローチが非常に大事で、同

時に幼稚園だけでなく保育所からもアプローチしてもらわなければいけないと思います。幼稚園や保育所ではこんなことしているよということを伝えると同時に、小学校の先生の意識変革も非常に大事だと思います。そうしないと、せっかく子どもがこんな力をつけたよ、というふうに持っていっても、小学校システムでいかれると、せっかく作った力が継承されないのではないかと心配していますので、その辺もご配慮いただけたらと思います。

出前授業も含めて人間関係作りが非常に大事だと思います。小学校、中学校、幼稚園の先生が。そういった意味で今夏休み中に行われている研修等がありますね、これは非常に大事なポイントと思いますが、これをうまく活用しながら人間関係づくりをしていただければ。あるいは新しい集まり、幼小連携プロジェクトみたいなものを作られると、粋にいくのかなと思います。

＜並河市長＞

何か今おっしゃっていただいた件ですでに取り組んでいるというものがあればご紹介をお願いします。

＜吉岡次長＞

具体的にどのあたりまで先生方の交流が進められているかというところまではきちっと掴んでいるわけではないのですが、必ず中学校区のブロック単位で研修会をして、小さなテーマに分かれ、小さな集団でそれぞれの学校の課題を共通認識している。先日西中校区で行われたのを見させていただいた際、小グループに分かれてテーマを決めて、先生方がひざを突き合わせて話し合っているというところを実際見ました。そういうことをしてもらうと、現場同士の意見交流が盛んに行われて、今、中学校の先生が課題に思っていることが小学校の先生にわかり、小学校で課題に思っていることが中学校の先生にもわかるということで、現場同士のつながりも大事にしていきたいと考えています。

＜並河市長＞

その辺はきちんと他の校区でもできているかというフォローアップをさせていただくのと、そういう交流の場にどうしても保育所が教委と児童福祉で分かれてしまうところもあるかもしれませんので、きちんと保育所も入れているというのをできたら。何か児童福祉課の方から補足でありますか。どういう形で今絡めているとか、小学校との連携等。

＜榊課長補佐＞

小学校の先生が保育所まで来ていただいて、子ども達の様子を見ていただいたり、子ども達と一緒に活動していただいたり、というのを今回は計画に入れていただいているところです。テーマでという話まではまだいかないですが、今年はそういった方向でさせていただいております。

＜並河市長＞

幼稚園と小学校でやっていることもうまく情報共有していただいて、子どもにとったら小学校になったら一緒になるわけですから。

＜名倉委員＞
保育所のことなのですが、ポイントとなるのは保育所の関わりだと思います。小学校に入ってくるのを見ましたら、幼稚園より全体的に保育所の方が多いこともあります。しかも多方面からの保育所で入学される児童も多いので、どうやってそれを解消していくかですね。難しいと思います。それに児童福祉の管轄ですので、１人１人の子どもを見てあげるという意味で密にしていくしかないかなと思うのですが、何年か前から幼小連携は結構進んでいるのかと思うのですが、やはり保育所とどう連携していくかということが一番ポイントになるかと思います。

＜並河市長＞
ありがとうございます。いかがでしょうか。

＜前川委員＞
小 1 プロブレムの問題についてはだいぶ以前からあり、教育委員会でもこの話は議論があったのですが、どうしても教育委員会での議論の中では幼小というのが中心となっていっていたと思うのです。ところが、こういった総合教育会議で、保育所も含めた連携という形に進んでいっており、今回だいぶ形として整ってきたと思うのです。幼小保の連携が。それで、現場はどんどん連携が進んでいってもらい、また行政としても、教育委員会と児童福祉課との連携も密にしていっていただくというのが当然今後も必要になってくるのだろうと思います。

＜西畑委員＞
少し話がずれるかもしれませんが、やまだこども園について、お話を伺ったのは、同じこども園の中でも、幼稚園的保育をしている部分と保育所的保育している部分と２個立てになっている。この２個立てになっている部分というのが、先生方の間で意識のずれがあるのかと。同じことを言っていても言葉の問題であったりもするのですが、用語の統一ということを今図っている様な事をおっしゃっていましたけれども、先生方の間で教育に対する考え方のずれがある以上、幼保連携というところがなかなか進まない。そこから小学校に上がったときに、幼稚園から来た子と保育所から来た子との感覚のずれと言いますか、親の立場で子ども達を見ていても、保育所から来ている子は幼稚園の子と雰囲気が違うなという部分を感じるところが多々あったんですね。やまだこども園というひとつの園の中でもそうやって差があるというお話をされているわけですけど、よほど摺合せをしていかなければ難しいと思います。

＜並河市長＞
　用語自体に差異があるのですね。

＜西畑委員＞
　らしいです。今年教頭先生が幼稚園から移られていかれましたけども、やはりなかなかすんなり話が通らないというお話をされていました。

＜並河市長＞
　何か聞いていますか。

＜吉岡次長＞
　元々保育所は養護という今までの認識という下で保育所の活動が成り立っている、幼稚園の方は養護というより保育というところに重点が置かれているところがあり、若干そこの重点の置き方に今までから差があったのだと思います。なので多分、やまだこども園に今年行かれた主任の先生はそこで自分の今までの感覚と現場の感覚とが若干違和感というか難しく感じておられるところもあるかと思いますが、やまだこども園自体は、その辺のところは何年もかかっていますので、修復されて、やまだこども園としての価値観を持って保育を進めてくれているはずです。その辺のところも含め、今幼稚園の先生と保育所の先生と合同で研修をするような研修会も開催しています。保育所には教育課程は関係ないということではなく、幼稚園の教育課程ではこういうことをするということを知ってもらう上で、保育所の先生にも来てもらっているというのがあります。その辺はちょっとずつ価値観というか、養護というのも幼稚園の先生は理解していかないといけないだろうし、幼稚園の教育課程ということも、保育所の先生に理解してもらわないといけない部分もあるだろうし、その辺は連携をしているところです。

＜並河市長＞
　今いろいろご議論を出していただいたところなので、なんとなくはわかるのですが、具体的にどんな事例があるのかというのをまた教えていただいて。今、西畑委員の方でそういう声が聞こえているのであれば、やまだこども園においても例えばこういう部分で受け止め方が先生によって違うとかいう部分を抽出すると、他の園や所にいるときでも参考になりますので、そこは次の宿題としてヒアリングをしっかりやっていただくということで、よろしくお願いします。

＜森継教育長＞
　養護と保育の違いについて、ちょっと高いところで遊ぶ子どもを幼稚園の先生は見守っているが、保育園の先生は、それはちょっと危ないのではとおっしゃるような感じかと私

はとっています。けがをされると困るという考えがあるのかなと思う。

＜並河市長＞
安全に保育するという方法について、どうしても教育的効果というよりそっちの方にいってしまうという。そういうことですね。

＜森継教育長＞
そういうことです。

＜並河市長＞
それがそういう環境に育った子どもが小学校に上がったときにどういう感じで交わっていくのだろうというところを何かテーマに感じるところがあるのであれば、何か事例としてございますか。どんな時に違うなと思われますか。

＜西畑委員＞
「ちゃんと並びなさい」と言ってもなかなか並ばないといった子を幼稚園ではあまり見たことがないなと思ったことが保育園にはあるように思う。

＜並河市長＞
運動会とか見ている限りでは両方ともしっかりやっている感じがするのですが。

＜名倉委員＞
習慣的な違いがありまして、まず幼稚園は並ぶことから始めて、「ご挨拶しましょう」から始まりますが、保育園は、来たらそれぞれそのまま保育に入ってしまいます。習慣の違いがあるというのをおっしゃっていたのは覚えています。ですので、そういう習慣づけをしていけば、そういうのもできるのではないかと思います。

＜西畑委員＞
小学校の PTA をやっていた中で子ども達と触れ合っていくというふうな話の中で、ちょっと感じた部分です。

＜並河委員＞
またそしたらそれは児童福祉と学校教育課の方で現場の話も聞きながら。

＜田中委員＞
今私は保育所の方に行っているのですが、幼稚園と保育所は目的が違うかったのです。保育所はお母さんやお父さんが仕事するために預ける。なので朝から晩まで見てあげない

といけない。そしてお父さんやお母さんがしなければいけないことをするのが養護なのです。そういう背景がかつてあって、今は仕事をする親が幼稚園に送り出していますね。そうすると、お父さんお母さんの願いを受けながら、幼稚園はしなければならない域にきている。と同時に、認定こども園というのが出てきた。これはいわゆる保育所として厚生省と文科省が入ってきたのが認定こども園。今認定こども園で何を学ぶのかというと、結局指導指針が変わってきつつあるのです、保育所側が。幼稚園も少し変わってきつつあります。これをこれからはうまく折衷しなければいけないということを私たちは認識しなければいけない。もっと申し上げれば、ここの文章に体力向上の取組みがありますが、幼稚園については運動能力実態調査をされるのに、保育所にはなかった。どうして保育所で運動能力実態調査をしないのかなと質問しようと思ったのは、周りがみんなそんな認識の中にいるのではないか、だからそういう意味では意識変革をこの機会にするべきではないかと。そのためには子ども子育て会議というのがあるのですかね。そこでは何をされておられるのかを聞きたいのですが。

＜並河市長＞
　あれはどちらかというと。保育人数やうちの支援事業をどのように組み立てるかというものだったと思うのですが。詳細な説明をよろしいですか。

＜榊課長補佐＞
　今言われていたように、子育て支援事業についての取組みを話しているところです。

＜並河市長＞
　待機児童数やうちが子ども子育て支援事業でやる事業の枠組みをどのようにしてボリュームをどうするかとかそういう話であって、あまり今おっしゃっていただいたような部分ではないですね。中身の部分というよりは、骨格の部分ということかなと。

＜田中委員＞
　本来の目的はそうなんですか。

＜並河市長＞
　事業自体をどうするかということですよね。

＜田中委員＞
　そうですね、その辺を議論するのはそこしかないと思うのですが。

＜並河市長＞
　むしろ今小学校１年生になったときに、どれだけ子ども達がスムーズに上がってきて、

学校を作っていけるかなということを議論するのがこの場だと思うので、ここでしっかりと今おっしゃっていただいたような情報を共有するのが一番いいのかなと思うのですが。

せっかく話題にも出ましたので、次の体力向上でどのようになっているか。

＜事務局　三喜田＞

資料６ページの中ごろ、項目３「体力向上に向けた取組み」に移ります。

「体力向上に向けた取組み」について、教育大綱では、就学前においては「幼児期に運動意欲を向上させ、小学校での体力向上プランにつながる「朝のリズム体操」や「キッズサッカー」等の取組を実施します。」とされ、就学後においては「児童生徒の体力向上を目指し、「スポーツの町・天理」として天理大学との連携事業を取り組みます。」としています。体力向上に向けた取組といたしまして、幼稚園では、「おはようタイム」「うきうきタイム」等、呼び名は園により違いますが、朝などに体を動かす時間を設定して体力向上に取り組むとともに、外部から講師を招き、体操教室やサッカー教室も開催して楽しく、かつ、正しく運動に取り組める機会を提供しています。また、芝生園庭を持つ幼稚園では芝生を活かした活動を推進していきます。

そして、先ほどご指摘がありましたが、運動能力実態調査を幼稚園では実施しており、幼児の運動能力を把握して今後の指導につなげるとともに、調査結果を保護者の方と共有することで保護者の方が子どもの体力について考える契機にしていきたいと考えています。

一方、小学校では、市内の中学校・高校の先生や生徒さんの協力を得ながらスポーツテストや体育の授業を実施したり、天理大学から専門講師を招いて「子どもが意欲的に活動する体育授業の工夫」をテーマにした実技講習会を受講して、児童の体力向上に向けた取組を推進しています。

また、奈良県の教育委員会が主催する「外遊び、みんなでチャレンジ！」に積極的に参加するよう市内の小学校に呼びかけを行っており、現在の参加状況は、資料７ページの中ごろ③のとおりで、丹波市小学校と櫟本小学校が成績優秀校として表彰を受けております。

一方、保育所では、日常の保育における遊びの中に運動的な要素を取り入れた「運動遊び」を行っており、特に体幹を鍛えることに重点を置いた取組を推進しています。

体力向上については以上です。

＜並河市長＞

先ほど田中委員よりありましたが、幼稚園では運動能力実態調査というのがあるけれどもということですね。

保育所・園では全然ないのですか。

＜榊課長補佐＞

はい。ありません。

＜並河市長＞
　それは小学校になってから何か、影響は出るのでしょうか。

＜榊課長補佐＞
　日々の保育の中でも総合的な保育の中で、運動遊び、体幹を鍛えるというような形にしています。

＜並河市長＞
　今やライフスタイルの関係で保育所・保育園という形で行かせていますが、親側のニーズからしたら、うちの子どもをどういう風にしてほしいということについて、幼稚園に行かすのと保育所に行かすのと、そこまで極端な違いはありませんし、小学校に上がったとき求められることについても、保育所から来られているからどう、ということもないと思いますので、現場でできる限界もあるかもしれません。幼稚園でやっていることと保育所・園でやっていることというのをしっかり横で突き合わせるようなことというのは大事かなというのがこのお話ですね。

＜田中委員＞
　同じ子どもが同じこと先ほど名倉委員がおっしゃったように、いろんなところから来るのですが、多くの保育所から来た１年生と、幼稚園から来た１年生、この子ども達の体力ぐらいは、次に１年生を受け止める先生方が知っておけば、より体力向上につながるのではないか。

＜並河市長＞
　今出ているのは規範意識的な部分と、生活習慣、体力、そのあたりがキーワードで出たかなと思いますので、うちの中で児童福祉と学校教育課の方で一度それがどういう風になっているかを整理して、次の機会に出させていただけたらなと思います。
　それでいうと私の個人的意見としては、文章の並びが幼稚園・小学校・保育所となっているところが気になります。就学前ということで幼稚園と保育所がきて、それで就学後の小学校でどれだけ一体となってやっていけるかを目指していくのが今日の話かと思うので。
　他になにかありますか。

＜西畑委員＞
　子ども達が意欲的に活動するというところ、自分が 30 年ほど前は意欲的に活動しなかった方です。体動かしても全然足も速くならないし、力もつかないし、サッカーしても後ろに下がらされているし、全然おもしろくない。おもしろくなくなったらどんどん体を動かさなくなる。それは勉強でも一緒だと思います。やってもやっても成績が上がらなければ勉強したくなくなるというのは同じようなことなので。何かここのところで、体力のつい

ていない子ども達については今どのような取組をなされようとしているのか、何か決まっていることがあれば教えていただきたいです。

＜並河市長＞
　非常に私自身も身につまされる話です。
　何かございますか。

＜吉岡次長＞
　難しい運動をするとなればすごい抵抗感があるのかなと思いますので、今進めています「外遊びみんなでチャレンジ」というのは、ごく簡単なボール投げをしたり、足でボールを蹴ったりと、簡単なところから自分たちの記録に挑戦していく、それを県の方に登録していって、自分たちの記録が県のホームページ見たら挙がっている、ということで、やり甲斐が直に実感できるようになっていますので、子ども達の意欲になるかなと。難しい動きでなく、簡単な動きで、日常ボールに触れたり、外で友達と体を動かしたりとか、そういうところをするようにということで、「外遊びみんなでチャレンジ」を進めています。

＜並河市長＞
　苦手な子は苦手な子なりに頑張ろうという気になる工夫はありますかということですが。

＜吉岡次長＞
　学級や学校の中でチャレンジするという雰囲気を作ることによって、私もやってみようかな、と。そこまで難しいことではありませんので。

＜並河市長＞
　そこまで得手不得手が出ないということですね。
　ちなみにこれは今３校が登録しているということですが、他の学校はどうなっていますか。

＜吉岡次長＞
　今のところまだ進んでおりません。

＜並河市長＞
　方向性は。

＜吉岡次長＞
　みんなでやろうと声はかけています。

＜森継教育長＞
　２年前にしなさいと言いました。

＜吉岡次長＞
　ここに挙がっているのは、春の、４～６月の登録で、昨年度はもっとたくさんの学校が登録しているはずです。

＜並河市長＞
　一回登録したらずっと登録されているんじゃないんですか。

＜吉岡次長＞
　季節によって分かれているようで、そこで登録していくということです。

＜並河市長＞
　最低どれかは参加するということで教育長から檄を飛ばしていただいて。

＜森継教育長＞
　言っているのですが。

＜並河市長＞
　伝わっているのですか。

＜森継教育長＞
　伝わっているはずです。

＜並河市長＞
　ではいずれの季節も参加しない学校があれば指導するようにしてください。

＜森継教育長＞
みんなでやるから楽しい、そして評価、ランキングもある。表彰状も各学校に出していただきたいなと思っています。

＜並河市長＞
　参加状況も含めて検討をさせていただくことといたします。
　次に進めていきたいのですが、学習状況調査について教育長に分析していただいたときに（４）基礎学力の向上と学習意欲を高める取組みの推進について議論をさせていただきたいと思います。幼小連携の流れもありますので、先に（５）をお願いします。

（５）学校図書館及び特別教室の市民への開放

＜事務局　三喜田＞

資料８ページの項目５「学校図書館及び特別教室の市民への開放」に移ります。この項目について、教育大綱では「学校と地域住民のつながりをさらに深め、地域ぐるみの子育てを推進するため、児童生徒や地域の人々に教育環境を提供し、適切な安全対策を講じた上で、地域の中の居場所づくりとしての学校図書館・多目的教室などの学校施設を開放します。」としています。本市では平成 28 年度より、井戸堂小学校及び前栽小学校で「多目的室」を、櫟本小学校及び前栽小学校では「図書館」をそれぞれ地域の人々に開放して利用していただくべく取組みを進めています。

多目的教室の利用については、今年度に登録申請を少し簡素化して受付を行っているところであり、昨年は井戸堂小学校で２件の登録申請があったのみでしたが、今年度は前栽小学校で地域の子ども会からの登録申請があり、利用団体が増えたところです。とはいえ、まだまだ多目的室の利用が進んでいるとは言いにくい状況で、公民館だより等で定期的に周知を行っていますが、十分に行き届いていないのが現状です。今年度は、各学校の多目的教室をより多くの団体に利用頂けるように、様々な機会をとらえて、子育て世代のための活動を行っている団体等にも周知していきたいと考えています。

学校図書館の開放については、櫟本小学校では、昨年度から地域と学校とで構成されるコミュニティ協議会が中心となって地域連携型の図書館開放が進んでいます。図書館開放の時間帯が小学校の昼休みと重なるため、小学校の図書委員による読み聞かせを行ったり、来校された園児や保護者の方に校長の手作りの栞などを渡したり、来校された方が楽しんで利用できるように工夫を行っています。今年度はこれまでに、４回図書館開放を実施し、毎回多数の園児や保護者が参加し、賑わいを見せていますが、今後は、小学校の保護者の方の利用についても検討し、より一層地域の方が身近に感じられる学校図書館を目指していきたいと考えています。一方、前栽小学校では、平日の学校に関係者以外の人が入る事への懸念、安全面・プライバシー面に対する危惧から、櫟本小学校のように広く地域の人が利用できる状況にはなく、昨年度は事前に日程等を調整した幼稚園や保育所の園児と、小学１年生との交流会を図書館で実施するにとどまったところです。しかし、今年の６月から毎月第３水曜日の下校後、午後２時４５分から午後４時の時間帯において、前栽幼稚園の園児とその保護者を対象に図書館の開放を始めました。図書館開放の実施にあたって、前栽幼稚園の園だよりでの告知や、保護者への声掛けを行い、６月は２０名、７月は２７名の参加がありました。櫟本に比べると、まだ取組み自体が浸透していない状況ではありますが、季節ごとにテーマを決めた絵本を取りそろえたり、ボランティア団体による読み聞かせや外国語指導助手による英語の絵本の読み聞かせなどを行い、園児たちが興味を持って図書館開放に参加できるような工夫を行うとともに、図書館を利用できる方の拡大についても、学校及び保護者の方と相談しながら、検討を進めていきたいと考えています。

＜並河市長＞
まず多目的教室について、先般子育てサークルの方との意見交換をした際にご紹介をしたら、「そういうところ使えるのですか。」という反応がありました。あの後どうなりましたか。井戸堂と前栽は登録していただきましたか。

＜西岡課長＞
児童福祉課長から教育総務課へ使用にあたっての事業の要望等を出していただいて、各団体にお配りしています。まだ登録はしていただいておりませんが、再確認したいと思います。

＜並河市長＞
フォローアップをお願いします。地域の活動をされていても気軽に集まれる場所がないというお話だったので、まさにそういう事のために作っていると申し上げたら、一つの団体は前栽校区で活動しているということだったので、それであればどんどん使ってくださいとお話しました。
図書館も共通してですが、櫟本が圧倒的に進んでいるという感じがあります。私も見に行かせていただいたら、子どもが園児に読み聞かせをやってあげたり、子ども自身がいきいき参加して、高齢者とも色々な作業をやっています。何が違うのだろうというところですが、やはりコミュニティ協議会が非常に中心になって地元主導で進んでくれているというのが、圧倒的に強いと思っています。行政側からやりましょうと言うだけでは進んでいかず、地域がやっているから皆さんも信頼してやってくれているかなと思います。来た人のチェックも櫟本はしっかりやっていますので、動線からすれば子供達が帰るところと重なっていますが、安全対策等懸念は示されてないですよね。

＜名倉委員＞
そうですね。地域交流会のメンバーの中には、長寿会、婦人会、ＰＴＡ、元図書館司書をされていた方もいます。様々な多方面から選ばれた方がコーディネーターになっておられる。全体的にバックアップする体制が元々出来上がっている。帰りも長寿会の方が見守りもされております。自然発生という形で学校側と話あわれて出来上がったコミュニティ協議会ですので強いです。

＜並河市長＞
櫟本はコミュニティ協議会と長寿会がうまくかみ合って出来ているので、「これだけのことがやれば出来るのですよ」という情報共有は他校区に対してもやりたいと思っています。今は図書館開放だけでなく、櫟本公民館の自習室でマチカ塾というのをやられていて、子ども達が地域行事で社会貢献をしたら、それで塾に通う権利を得て、公民館に行ったら大学生が教えてくれる。これを行政が見つけてきた大学生となれば謝礼等と

いう話になるが、地域コミュニティ協議会が主導でやっておられるので、その知り合いにお願いしており、条件がうまくかみあったというところはあるとは思いますが、非常に差が広がっている。

＜名倉委員＞
　核となる方がすごく情報を収集されて、ものすごく勉強されているので、横のつながりも強いし、いいようにどんどんまわっている。

＜並河市長＞
　各校区のコミュニティ協議会みんなで集まる場（情報共有の場）はありますか。

＜嶋﨑課長＞
　あります。市役所に集まっていただいて研修会を開きます。

＜並河市長＞
　今年どこかのタイミングで櫟本から櫟本で取組んでいる事について、ぜひ発表いただいて・・・。

＜森継教育長＞
　それは昨年度いたしました。

＜並河市長＞
　それで反応はどうでしたか。

＜森継教育長＞
　柳本校区が興味を示していました。

＜並河市長＞
　見には行っていただいていますか。

＜吉岡次長＞
　そこまでは、まだ行っておりません。

＜並河市長＞
　ぜひ図書館開放等の時に前栽で色々議論が出ました。やる前からどちらかと言えば心配が出てきて踏み出す以前の問題で止まっている部分があるので、やっている状況を実際に見ていただく機会を作っていただきたい。コミュニティ協議会に参加いただいてい

る方もお忙しいかもしれませんが、櫟本の図書館開放、マチカ塾という現場を実際に見てもらいたいのと、あとは人選がポイントですね。

＜西畑委員＞
　コミュニティ協議会に参加する人が、横のつながりをもって、ある程度みんなのところに「こんな事をやろうよ。」と言えるような人っていうのが必要である。櫟本であればそういう事が出来る人であったということですね。

＜並河市長＞
　現在、コミュニティ協議会は構成団体で言うとどこから出てきているのですか。

＜天羽参与＞
　各学校それぞれで規定はありません。

＜並河市長＞
　学校自体が櫟本であれば、コミュニティ協議会と相当議論して、こういう学校づくりをしたいという事をしっかり伝えられる中で、地元も応えているという印象があります。学校側の方がコミュニティ協議会にこういう学校づくりなり子どもづくりをしたいという事で真剣に議論をしないとなかなか地域の方から頑張ってくださいというのも難しいのかなと思います。

＜田中委員＞
　基本的にコミュニティスクールというのは、この学校の子ども達のどこが課題なのか、それを整理してコミュニティ協議会の方に諮る。何かできませんか？とリードしていくのがコミュニティティスクールではなかったのかなと思います。コミュニティ協議会の責任においてやってもらった方が良いのではないか。

＜並河市長＞
　学校がコミュニティ協議会との間で地域との間で何をしたいのかという事を校長先生なりがビジョンを持っていないと進みづらいのかなと思います。

＜天羽参与＞
　コミュニティ協議会自体にすでに学校が入っている。学校と地域と一緒に作っているのがコミュニティ協議会です。今年度はさらに連携先を拡げて地域学校協働本部に変えています。予算取りの関係もありますが、コミュニティ協議会という名称でやっていましたが、さらに連携先を拡げて地域学校協働本部というものを今年度進めています。先ほど言われた市全体が集まる事はないのかという事で、去年までどちらかというと名目

で来ていただいていた方を終了しまして、協働本部になったので、各校区から必ず会議に出てくれて中心で動いてくださる方を挙げて下さいということで、今年新たに運営会議を設けまして、ここでこちらから情報提供をしたり、各協働本部でやっている取組みをお互いに交流したりということで、コーディネーターの資質の向上をはかり、色々なヒントをもらって各校区に持って帰ってもらって新しい事をやってもらうという事を考えています。

＜並河市長＞
　私が不勉強だけなのかもしれませんが、櫟本でこういう事をやっていますとなってもあまりそれが他の校区に響いているような動きが見えない。

＜天羽参与＞
　昨年度の最後の研修会で福住と櫟本の取組みを発表してもらいました。たくさんの方にすごく感じてもらいました。ただなかなかそこまで出来ないというそれぞれの事情があって。あとからお話をいただき、感じるのは感じてもらいました。進めるには孤軍奮闘ではいかないので、運営会議を設けてそこで拡げていきたいと思います。

＜並河市長＞
　一度コミュニティ協議会自体が今年目指している事を或いは来年にかけて目指している事を何かという事をこの場で共有させていただいてよろしいですか。

＜天羽参与＞
　はい。

＜並河市長＞
　それぞれのコミュニティ協議会、まだ形には見えてきていないかもしれないが、こういう形で動いているのだというところも我々も分かりますし、どうしても目立っているところに目がいってしまうので、他の所が動けていないのかとなってしまうと、それも失礼なことですから、何を今目指してやろうとしているのかという事を一度取りまとめていただけたら有り難いです。
　櫟本の方であれば幼稚園の子ども達のためという事と小学生自身が図書館に来る頻度もすごく増えたとか、小学生自身が自分の役割を果たしてすごく頑張ってくれているというところだと思うのですが、前栽の方に関しては、子どもと時間帯が合うと安全確保の点から良くないという事で、あえて切り分けて下校後という発想なので、その時点で効果からしたら半減している。理解を深めていかないと難しいのかなというところはありますが、コミュニティ協議会なり協働本部で必要性について理解をしないといけない。

＜田中委員＞
　今のお話のなかで幼稚園が小学校へ勉強に行くというのは、ダメなのですか。そうなると、幼小連携は誰が責任を取ってくれるのですかね。

＜森継教育長＞
　幼小連携と図書館に行くのと微妙に反応が違う。幼小連携は園全体で行きますので。

＜並河市長＞
　別に図書館開放が目的ではないです。やっている中で幼小・地域との連携が出来ているというのが櫟本の形だと思います。
　コミュニティ協議会の目指すところは整理して、個別に対応しましょう。

＜森継教育長＞
　地域学校協働本部に名前が変わりました。それで目的も新しい社会に開かれた教育課程ということで天理市はたくさん活動をしていただいて、奈良県でも他市町村に誇れるような活動をしていただいている。学校も色々な活動をしている中で、たしかに櫟本はかなり協力があると思います。
学校長の方も、こういう課題があってというのは伝えて協力を求めたいと思ってはいると思いますが、教師の方に多忙感とかありまして、そこをクリアしていかなければうまくいかないところがある。先ほど一歩進んで、学校の教育目標等を共有して地域とともに活動していく。先生方の協力とか、意識を変えていかなければと思うのです。

＜並河市長＞
　櫟本には核になる先生が校長先生以外にいます。

＜森継教育長＞
　コミュニティスクール化していくのに、櫟本、福住のように地域の方がおられて進んで行くのが進みやすい。学校が主導するとか市教委が主導するとなるとうまくいかないのかなと個人的には思っています。

＜並河市長＞
　まずは協働本部で各校何をしようとしているのか整理をしましょう。それでどこまで何ができるのかというのを我々も見ながらやっていったらいいのかなと思います。前栽の図書館開放では、天理市のフェイスブックへの書き込みで「幼稚園だけで保育所はだめなのですか」というのがありました。これは保育所に拡げていくことはできないのですか。

＜吉岡次長＞
　可能だと思います。

＜並河市長＞
　せめて出来るところからしっかりやりましょう。
　続いて（６）（７）をまとめてやりましょう。

（６）　放課後子ども教室・土曜講座の推進

＜事務局三喜田＞
　次に、資料１０ページの、項目６「放課後子ども教室・土曜講座の推進」に移ります。この項目について、教育大綱では「全ての児童が放課後などを安全・安心に過ごすことができる居場所づくりとして、学校の多目的教室や余裕教室、運動場、体育館、その他公共施設などを利用した放課後子ども教室と土曜講座の充実を図ります。」としています。本市では、給食実施日の水曜日に、井戸堂小学校の児童を対象として放課後子ども教室「放課後わくわく広場」を開催しており、現在１０名の児童が登録して、３０分の勉強とその後の独自プログラムを楽しんでいます。一方、学校が休みの土曜日に学校の勉強はもちろん様々な体験学習等が受講できる土曜講座を開催し、又は開催の支援をしています。一つは、昨年度朝和小学校の図書室で実施していた「サタデースクール」について、今年度は櫟本公民館と式上公民館に会場を拡大させて開催しております。もう一つは、福住地区において地元ＮＰＯ法人と教育委員会・福住小学校とが「福住Ｓ・ジョブズ・スクール」を協働で実施しており、小規模特認制度で新たに加わった子どもを含んだ福住小学校の児童を対象に、「ヤマト野菜を育てる」「ふるさと探検」、「里山のめぐみ」を学習プロジェクトとして設定し、子どもたちが、年間を通して様々な体験やチャレンジをしていくことになっています。

（７）　高校・大学との連携

＜事務局三喜田＞
　次に、資料１１ページの、項目７「高校・大学との連携」に移ります。この項目について、教育大綱では「天理大学や天理高校、市内の公立高校などでは、レベルの高いスポーツ・音楽活動などが行われ、国際色豊かな環境もあります。幼稚園・小学校・中学校と高校・大学との相互連携を深めることで、他市にはない特色を体験活動を通して天理の教育に活かします。」としています。大学との連携については、従前より学校支援学生ボランティア事業「ＡＳＳＩＳＴ事業」により、市内の幼稚園、小学校、中学校において、保育補助や学習補助にあたってくれています。また、体力向上の項目でも触れましたが、天理大学の教授を講師に招いて「子どもが意欲的に活動する体育授業の工夫」をテーマにした実技講習会を受講して、児童の体力向上に向けた取組の推進に役立てています。また、添上

高校や二階堂高校の先生や生徒さんの支援を受けて、小学校でスポーツテストも実施しました。

＜並河市長＞
　色々な地域の連携によって放課後・土曜日をやるところから進めているところですが、皆さんご意見ございますか。

＜名倉委員＞
　大学との連携について、他の大学とは提携はしていないのですか。どういう経緯で天理大学、奈良女子大学と提携を結んでいるのですか。

＜森継教育長＞
　提携ではなく、参加している学生です。

＜吉岡次長＞
　天理大学とはこちらから出向いて行ってこういう取組みはしていると紹介しています。教育大とかは資料を送付しています。

＜名倉委員＞
　他にもアプローチをされているということですね。奈良教育大学とか。

＜吉岡次長＞
　県内の大学にはアプローチしています。奈良市は、幾ばくかのお金が出ています。また通う距離もあるので、天理大学とかが主になっています。

＜名倉委員＞
　学生の力は大きくて、子ども達も親しみやすい部分もあり、先生に無いような発想もあるので、十分に活用されて、また子ども達に色々な影響を与えてくれればと思います。

＜吉岡次長＞
　飛び込みで話をいただくこともあります。ただうまくマッチングしなければいけない。大学生の授業の空き時間とか、どうしても天理大学だったら、学校に近いところの幼稚園、保育所を希望される方が多い。1 時間 2 時間空いているから行きますという形で。遠くなると行き帰りの時間が取られてしまうので。

＜笹尾学校教育課指導主事＞
　今年は、県内の大学すべてに募集案内を送らせてもらったところ、学生の方から問い合

わせがあったのが、こちらに記載ある大学です。天理大学に近いところで前栽校区、丹波市小学校、山の辺小学校あたりが多いですが、学生が自分の活動のためにということで、意欲的に活動してくださっているところはあります。学生にとっても良い活動ですし、校・園にとっても非常に有り難い活動となっています。

＜並河市長＞
学校のカリキュラム以外の部分で、学生に協力いただいているところはあるので、出来るだけ拡げていければなと思います。近々であれば、子ども食堂を丹波市校区でやられるところに天大の学生に来てもらうというのがあります。或いは、祝徳公民館であおぞら倶楽部という知的障害児のみなさんの家族ぐるみのサークルに学生が来られてます。

＜西畑委員＞
子ども大会に奈良高専の人が来てくれていましたが、奈良高専には声をかけていますか。

＜吉岡次長＞
奈良高専にはかけていません。

＜並河市長＞
子ども大会に来てくれるのであれば、こういうところにも来てくれるかもしれませんね。

＜森継教育長＞
授業がフルで入っているので厳しいかもしれません。

＜並河市長＞
添上・二階堂高校がやれるような範囲だったらどうでしょうか。

＜西畑委員＞
専攻科の子に声をかけてもいいのかなと。

＜並河市長＞
（８）のＩＣＴを活用した学習内容の充実に移ります。

（８）　ＩＣＴを活用した学習内容の充実

＜事務局　三喜田＞
資料１２ページの、項目８「ＩＣＴを活用した学習内容の充実」についてです。この項目について、教育大綱では「全ての市立小中学校にＩＣＴの環境整備を行い、タブレット型パソコンを導入します。手で直接画面を操作するというタブレットの利点を活かし、主

体的な作業を取り入れた児童生徒にとって興味深い授業を展開します。また、福住小中学校では、高原地域振興の観点から、少人数制の魅力を活かした、英語教育やＩＣＴ教育に重点を置いた特色ある学校づくりを推進します。」としています。本市では、昨年度にタブレット等のＩＣＴに関する環境整備を行ったところですが、今年度は、整備されたタブレット等を効果的に授業に活用できるようにするための研究授業を実施し、教職員の活用能力や指導力の向上を図っていきます。一方、高原地域振興の観点から、少人数制の魅力を活かした、英語教育やＩＣＴ教育に重点を置いた特色ある学校づくりを目指している福住小学校では、昨年度より英語科の教科化を見据えたＩＣＴ機器を活用したオンライン英会話（オンライン・スピーキング・トレーニング）を実施しており、ネイティブの外国人講師とオールイングリッシュで話す経験の積み重ねにより、英語によるコミュニケーション能力の向上を図っております。この福住小学校における取組は、市内外の公立小学校に先がけた取組であり、今年度から実施している小規模特認校としての大きな特色になっています。現在は、市内平野部から８名の生徒が福住小学校に通学していますが、福住小学校にはすでに来年についての問い合わせが複数きており、この取組が高原地区における児童生徒の獲得数増加や、市外からの移住・定住につながる取組になることが期待されるところです。

＜西畑委員＞
タブレットに直接触って何かをやることは、すごく子ども達にとって興味を持つところなので、教材は何でもよいので、触らしてあげるだけで、全然興味の持ち方が違うとみています。そこで、どれだけ触れる端末が子ども達にいきわたっているのかというところが、難しいところになってくるかなと思います。福住のような人数の少ないところですと、皆それぞれ触れるものがあるとしても、前栽のような大きなところになってくると、使おうと思ってもなかなか順番が回ってこないということになってくると思います。

＜並河市長＞
今現在フル稼働で使われているので使えないという状況かと言うと、パソコンを導入する際にタブレットとして切り離せるものを導入したのですが、その辺りはどうですか。

＜西岡教育総務課長＞
タブレットについて中学校は台数入っていますが、小学校は２人に１台ぐらいです。

＜並河市長＞
それがどのくらいの頻度として、実際授業で活用されているのかと言うと、先生によっても違うのかなという印象があるのですが。良き事例がありましたら。

＜森継教育長＞

体育の授業で跳び箱やマット運動を録画してそれで自分の班の人と比べて見たりするのが、一番使いやすい。後は写真を撮ってそこにコメントを入れて発表する。

＜並河市長＞
むしろこういう活用をしたらもっと拡がるとかございましたら。

＜西畑委員＞
タブレットは持って歩いている事が一番特徴的だと思うので、持って行った先で映したもの、算数の授業のなかで三角を見つけましょうというのがあって、学校のなかでここに三角あった、ここにも三角あったと、どんな三角やろうというのを持って帰って議論をさせる。そういうアクティブに持って行って写していく事をさせようとすると、２人に１台では足らないかなという感じはする。クラス１人に１台あたらないと自分の好きな所に持って写真撮影などをさせることが出来た方がよいと思う。先生が２人に１台で組み合わせで行くというふうにするかもしれないが、やはり自分の好きなように触ってやりたいというところから学習意欲に繋がっていくという感じは持っているので。何でもよいから写してこいというのが手っ取り早い使い方です。そこに教材を入れたりとかではなくて、こういうものを発見したと発表するには良いツールだと思います。

＜並河市長＞
予算的な事があるので。

＜西畑委員＞
おっしゃる通りです。

＜並河市長＞
あとそれ以上にまだそこまで活用されきっているので、これを増やそうというところまではいけていないかなと思っております。本当にこれは使い倒されているという状況であれば、重点配置という風にも思いますが、タブレットが活用されすぎてという事例がありますか。

＜吉岡次長＞
なかなか。

＜並河市長＞
今おっしゃっていただいたような、こういう風に授業で使ったらという事を各先生方に研修等で共有することはやれていますか。

＜吉岡次長＞
　定期的にやっています。

＜並河市長＞
　どのような事をやっているのかというのを次の機会に見せていただきながら、西畑委員にも入っていただいたら一気に議論のレベルが高まるかなと思います。
　例えば今おっしゃっていただいたような事はやっているのですか。

＜吉岡次長＞
　身近にできる作業だと思いますので、黒板とノートだけの授業から教師自身の意識を変えていくという、まさに今言われているアクティブラーニングの考え方かなと思っています。

＜並河市長＞
　比較的どの先生でもやりやすいようなものを具体的に見つけてく中で、これを取り入れて下さいとインプットしていくのが良いかなと思いますので、それは次回やりましょう。
　だいぶ時間がかかってしまいましたが、２．奈良県学習状況調査の結果報告及び検証を教育長から説明いただいた上で、（４）基礎学力の向上と学習意欲を高める取組みの推進に入りたいと思います。

２．奈良県学習状況調査の結果報告及び検証

【森継教育長から説明。】

＜並河市長＞
　まず全体的には前の学力調査試験よりも県平均にだいぶ近づくことができたので、各校６年生には頑張っていただいたということが言えるということですね。

＜森継教育長＞
　４年生の結果は去年より頑張っていただいている、今の中１は、小６段階よりは成績は向上しています。

＜並河市長＞
　中１は小６段階よりは成績向上、４年生の新しく受けている子たちが良かったということですね。ただその中で、状況を分析していった場合に、家庭の学習習慣や生活習慣、その辺の重要性がだいぶ見えてきたという部分と、別に経済状態とか家庭状態とかだけですべてを判断することはいいことではないけれども、統計的に見ていくと、一定の相関関係

は見られて、グループ分けしていくと、ひとり親家庭の方が家庭学習習慣、生活習慣の方で少し低い数字が出ていたり、あるいは要保護・準要保護が多いという校区の方が、このあたりの家庭学習習慣、生活習慣のところにマイナスの影響が見て取れるということですね。

こういう状況を受けて、どんどん塾に行かれて、進学志望のご家庭はそのままやっていただければよいのですが、公教育の在り方としてどういうことをやっていくのだというところを、（４）で我々は見ていかなければならない。こういう流れでよろしいでしょうか。

＜森継教育長＞

おっしゃる通りです。また、小４まではそこまで差がないということもわかりました。

＜並河市長＞

高学年になり、中学生になっていくときに、差が出てくるということ。中学生なんかであれば、置かれている特性によって、ほとんど勉強時間がないという子も一定数出てきているということですね。

何かここまででご質問はございませんか。

＜田中委員＞

結果を聞かせていただくと、よくわかりました。

＜名倉委員＞

小４～小６の間に一体何があったのかなと思いまして。

＜森継教育長＞

集団は違うものなので、これで言い切っていいものかわからないのですが、ただ、市長がおっしゃったように、勉強が難しくなるというのが一つかなと思います。でも難しくなり差が出るからこそ小さいときからしっかりした習慣づけがあって、自己肯定感、みんなで認めてあげるということをしていけば、差はもう少し小さくなるのかなと思います。

＜並河市長＞

あくまで仮説的に言えば、家庭学習習慣が元々薄いという状態で４年生から高学年に向かっていくときに、算数だったら分数だったりいろんな要素が出てきたり、漢字であったら急に難しくなってくるという中で、やはりちょっとずつ学習意欲というところがしんどくなってくる。一方ではスマホを持ったりとか生活習慣にマイナス要因になるようなところも増えてくると。両方合わせ技でいくと、４年生の段階ではそこまで極端な差がなかったところが、ちょっとずつ開いていますよねということが言えるのではなかろうかということですね。

＜仲谷局長＞
　分析していただいた傾向はあると思います。ただ学力が、勉強が難しくなっていくから顕著にその時に現れるのか、他の要因があるのか。

＜並河市長＞
　いろんな要因が重なっていると思うので、それをどうするか。

＜名倉委員＞
　教育長がおっしゃるには、その４年からの少し難しくなってきたのを解消するためには、低学年からの生活習慣や学習時間を取るというのが一番大事だということなんですよね。

＜並河市長＞
　仮説から導き出す一つの方向性としてはおっしゃる通りです。
　学習習慣なり生活習慣がある程度足腰としてあれば、そこでそこまで屈してしまわないのではなかろうかと。ではそのために、ここの（４）でどのようにしていけばいいかというその前段のところの分析だったと思っております。
　その上で（４）をお願いします。

＜事務局　三喜田＞
　教育長のほうから分析いただいたところではございますが、「学力向上」につきましては、大綱の方では、「わかりやすい授業を創造するとともに、全小学校での国語科の研修授業など「書く力」を育むための取組や、学習支援員によるきめ細やかな学習支援活動を実施します。」としています。
　教育大綱では、「書く力」が強調されているところではありますが、本市では、「書く力」を含む国語だけではなく、算数・数学に関する学力が全国平均・県平均よりも低い状態が続いており、特に学力が低い層の底上げが求められているところです。
　本市では、そのための手立てとして、平成２８年度よりスクールサポーターを増員して、児童生徒一人一人の状況や学習形態に対応しており、加えて今年度からは、基礎学力の定着を目指して、放課後や長期休業中における学習会を実施しているところです。
　今年度の奈良県の学習状況調査において、先ほどあったように、小学４年生の平均正答率が、奈良県平均レベルまで回復しております。平成２８年度からのスクールサポーターの増員が幾分かこれに寄与しているものと考えています。
　また、基本的な生活習慣や学習習慣の定着は、学力を伸ばすための基礎になる部分であり、引き続き粘り強く保護者に必要性を訴えるとともに連携を密にして取組みを進めていきたいと考えています。
　これで以上です。

＜並河市長＞
　はい、ありがとうございます。
　いかがでございましょう。
　ちなみに今夏期休暇真っ盛りでございますが、どんな感じで各校頑張っていただいておりますか。

＜吉岡次長＞
　放課後学習の延長として、中学校であれば部活の終わりとかあるいは定期的にこの日からこの日の間までとか、西中であれば部屋を自習室に開放してずっとオープンにしているとかというのもあります。小学校では、福住でしたら夏休みの１５日間午前中９時から１２時の間、子ども達に自由に学校に来てもらって、夏休みの学習会をしているような状況です。

＜並河市長＞
　参加状況とかそれぞれ我々が本来ターゲットとして目指しているところには来てもらっているのでしょうか。

＜吉岡次長＞
　今やっているところで全部把握しているわけではないですけども、放課後の学習会等を見ていますと、学年で数名に絞って、子ども達に声掛けをして、学習会を開催する。それで、どこの小学校みても、年間１５回前後の学習会を計画していまして、ほとんどの学校では外部指導者なんかも導入させてもらって今年度の取組みをやっていこうと。

＜並河市長＞
　目指しているところは子ども達に勉強の機会を作ってもらって、家庭での学習にもつなげてほしいというところではあるのですが。委員のみなさまにご意見いただけましたら。

＜田中委員＞
　取組については、ここに書いておりますので、重要なことに取り組んでいただいているなと思います。今後学習支援員とかスクールサポーターを導入していくときに、免許証をやはり持っていなければいけないのではないでしょうか。免許証を持っていても、子どもに意欲を持たせて算数あるいは国語、読み聞かせも含めて、こういった子どもに意欲を高めるような技術を持った先生があればいいなと。なければそういう先生方と話をもっとできる場面をしっかり持って、子どもの指導にあたっていただくのが一番いいのではないかと思います。先ほど体育の授業で出ていたけれども、やはり好きにならなければ。得意を伸ばしながら、不得意を高めていくような、こういう技量のある先生を目指した先生がい

ればいいなと思います。外部指導者も含めて。
それから、ターゲットを絞って児童が呼ばれるということについては、来る子ども達はどう思っているのかなと、ふと今疑問に思いました。

＜吉岡次長＞
その子達に劣等感をつけてはいけませんので、その辺は学校全部の中で、この子に来てほしいという子もいますので、あなたは必ず来なさいではなく、みんなにオープンに声をかけさせてもらう中で、保護者に先に連絡して、来させてくださいねという形で、その辺は教師の意図が保護者に伝わるような形で連携させていただいております。

＜並河市長＞
補講に行けば「成績の悪い人」と言われているような感じがするというようなことでは、返って自尊感情を損ねてしまうので、そこは気をつけながら、とはいえ、あなたに頑張ってほしいという子に来てもらわないと、意味もなくなってしまいますので。

＜森継教育長＞
山の辺小学校が昨年度先取りでされておられるところを見せていただいたのですが、少人数になりますし、担任や指導員とマンツーマンで一人ずつ当てて答えてと、楽しそうにされていて、そこまで残されて嫌というようではなかったと思います。

＜並河市長＞
割と楽しんでやっているのだなという印象ですね。

＜吉岡次長＞
周りの子もそれを認めています。
頑張れよと言ってくれる子もあれば、僕も今度残るわという子もあるし、やれなかった問題がそこでやれるようになって、そして授業の中で活かしていく。教師が見ていますので、授業の中で吸い上げることができるんですよ。そしてそれが自尊感情につながる。やったらできると。大事なのはやはり、できなかったことが一つでも二つでもその時間でできるようにしてあげるということが意欲につながると。

＜並河市長＞
やれなかったから諦めてしまうということでなく、やったらできるという体験を積み重ねていくのが一番大事なのかなと。

＜名倉委員＞
学校によってそれぞれ環境も違うとは思うのですが、今の天理市の現状で果たして１～3

年の学年で支援員やスクールサポートが充実されているのかという、今の現状をお聞かせ願いたいのと、あと、秋田県の取組みで見たのですが、授業の中でその内容を理解してもらって帰るというのを一番の目的としている小学校が、かなりサポーターや支援員を増やしてそれぞれの子ども達を目の行き届く限り見てあげると、劇的に学力が上がったという事例があったんです。それを見て、やはり手をかけたらかけた分子ども達の学習意欲も上がるし、結果も出るのかなと思ったことがありますので、今の天理市の現状は。

＜吉岡次長＞
　昨年度からスクールサポーターを倍にしてもらいました。昨年度に比べたら、きめ細やかになり、各１年生には授業に１人ないしのサポーターが一緒について入るようになっています。ただ、それで十分かと言われれば、なかなか十分ではないので、各校では人の配置などを工面し、一人分の予算で時間を削って二人来てもらい人手を確保する。朝の時間の間に多い人手を低学年の授業なんかに回していくというような形で工夫はしてくれています。

＜並河市長＞
　多ければ多い方がいいというのはわかっていますが、あとは全体予算の中で、いったん倍増させて、今全体の教育以外も含めた予算をどうしようかというような議論もしている中で、重要なことだということを重々認識はしつつ、どれだけ回せるかというところです。

＜名倉委員＞
　それぞれ学校の環境とか違いも加味しながら考えていただけたらなと思います。

＜前川委員＞
　最初はみんな同じようにスタートしているのでしょうけど、だんだんとわからなくなっていくというのは、先生もある程度やはり授業を進めていかないといけないという事情があると思うのですよね。クラスの中で、自立した子どもではありませんから、いろいろなタイプの子どもがいるから、当然先生は時間的な制約があって次の授業へといく中で、どうしてもわからなくなるという子がいるのは当然出てくると思います。ですから、学校に行かせていただいても、担任の先生以外にも 1 人あるいは２人おられるクラスというのが増えてきました。我々のころなんて、担任の先生しかいなかったので、だいぶきめ細かな取組みをしてくださっているので、これしかないのかなという気はします。

＜並河市長＞
　“教え合う”というのは、大阪の方でやっているところがあるのですよね。

＜吉岡次長＞

研究してくれている学校もあります。小グループになって、教え合う。子ども同士が学び合う中で新しいものを発見したりという、新しい授業のスタイルとして、教科によって取り入れている場合もあります。

＜並河市長＞
ものによりけりだと思いますが、その子達の相性、性格、教える側の生徒も、こんなのもわからないのかというような態度だったら、逆に自尊感情を損ねてしまうところもあるでしょうし、うまく、こういうやり方もあるんだよという中で対応してもらったらいいのかと。

＜吉岡次長＞
おっしゃったように、基礎学力の定着と学力の底上げというのも大事なのですが、先ほどから出ているように、家庭支援というもう１本の柱として、そこも今後大きな役割、スクールサポーターや支援員では学力の底上げはある程度しますが、家庭支援をどうしていくかというところは、学校だけでは限界が出てくるところかと思うので、その辺も考えていかなければならないかと思っています。

＜森継教育長＞
まずはスクールソーシャルワーカーを増員したい。

＜吉岡次長＞
スクールソーシャルワーカーは今年から入れさせていただきますが、週に１日だけですので。そしてなかなかそこにも挙がってこない家庭もありますので。

＜並河市長＞
まず見ていくとすごく家庭として荒れているわけでもないし、崩壊しているわけでもないし、一生懸命頑張っておられるけれども、なかなか諸条件からいって、お子さんの家庭学習がちゃんとやれているかというところまで手が回りきっていないというところが、将来に影響してくるのですよということをどこまで理解していただいているかというと、そこはまだまだ難しいのかと。家庭にどう気づきを与えていき、あるいはサポートが必要なところについてはどうサポートしていけばよいかというのは、うまくやれている良い事例というのはあるのでしょうか。

＜吉岡次長＞
いえ、なかなか全部が全部フォローはできないと思いますが、昔から言われているように、家庭訪問で足で稼いで、ちょっとでも様子を見に行って声掛けをするというのはできますが、それ以上のことはなかなかできない。これはもう学校だけでなく、福祉との関係

も出てくるでしょうし。

＜並河市長＞
学校でやってくれて当たり前という雰囲気もどうしても感じるときがある。家庭学習をしっかりやってらっしゃる家庭はそんな雰囲気ではないのですが。

＜前川委員＞
民生児童委員さんとの連携というのはどの程度あるのですか。

＜吉岡次長＞
いろいろ支援センターもありますし、子ども児童相談室とかも児童福祉課にありますから、連携は取っていますが、ある程度やはり重篤な家庭、そこに挙がってくる家庭はそうですが、そこまではいかない家庭については拾いきれないところもある。

＜並河市長＞
保護家庭になった場合には、ケースの中で民生が目が行き届くというのがありますが、そうでない場合、非常にゆとりがあるわけではないというところが、どうしても制度の中で隙間になってしまうということもあって。

＜吉岡次長＞
そういうところも情報を共有して、民生さんに足しげく声かけしてもらうことも、今後は必要になると思います。

＜田中委員＞
幼稚園や保育所のころから、親育ては大事だと思います。今でも例えば、してもらって当たり前と思って来られる場合があります。それは違いますよと、将来こうなるかもしれませんよという返しをするというのを、やはり連携図ってした方がいいのではないか。広げていく手だてを考えるのも一つの方法かもしれない。
もう一つ、先生方の負担を軽減しようというときに、家庭訪問は大事ですがしんどいです。そうすると、指導と切り離して、課題がある親に対しては完璧に入っていく先生を作っていかなければならない。それを担任とつなぎながらやる。これが必要だと思う。

＜吉岡次長＞
おっしゃる通りだと思います。そういう先生が１人でも２人でもいてくれたら。

＜並河市長＞
それは人員がそこにそれだけ要るかどうかということ。

＜西畑委員＞
　さらにきめ細かく子どもを見てやろうとすると、先生の労働時間等を考えると、人員を増やさざるを得ないですよね。凝縮して仕事しろといっても、今の中でも手いっぱいで一生懸命子どもの面倒みて、教材作って、という中で、人の手当というそれが教員という形でなくても、別の形で、何か手当をして動かないと、先生も何もしようがなくなる。

＜並河市長＞
　学校事務の支援システムを入れたりして、できるだけ教育の本丸のところに使える時間を確保するというような部分と、あとは本当に人の手当がどれだけつくのかという両方でございまして、このことは課題としては認識しております。

＜西畑委員＞
　先生方の労働時間がどうとか言いながら、こっちでは子どもの手当てをしなければならないというジレンマに陥ってしまっているので、どこかでブレイクスルーしなければならない。

＜並河市長＞
　あとはこれをどれだけきめ細かくやっていくのか、家庭のところまで。やはり踏み込み過ぎるとどうしようもないところもあるかと思うのですけども、具体的取り組みが今各校でやっていただいている中で、継続的にどういう効果が出てきているかというのを見させていただいて、良い事例についてはどんどん共有していくという形にできたらなと思います。
　早めにと言いつつも、時間いっぱいいっぱいまで使ってしまったという感じではあるのですけれども、この機会にみなさまから何かございますでしょうか。
　そしたら事務局から今後の日程等含めてお願いします。

＜事務局　三喜田＞
　今後の予定ですが、昨年はいじめ防止基本方針のパブコメもございましたので、年３回開かせていただきました。今年度については、２回か３回ということで予定しておりましたが、また課題もいろいろ頂戴いたしましたので、次回は冬に予定させていただきたいと考えておりますので、よろしくお願いいたします。

＜並河市長＞
　下半期の状況を振り返りつつ、来年度に向けた報告でということで、次の日程を確保させていただければと思います。
　よろしくお願いします。

以上